
ブッキッシュな二人

ぺけぼむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブッキッシュな二人

【Nコード】

N6829L

【作者名】

ぺけぼむ

【あらすじ】

読むことと書くことが何よりも深い絆であるような二人のことを書きます。

(1)

わたしはひとつ、人間の第七官にひびくような詩を書いてやりましょう。

——尾崎翠「第七官界彷徨」

明るい窓際にぺたりと座り込んで本を読んでいた。太陽を時々遮る雲の覆いが吹き去られる度に紙面が目が痛いほどに白く照り返し、すぐにまた暗くなる。その明滅の繰り返しがおもしろくて読み始めたばかりのその本を読み下すよりも暗転と照明の機を計るほうに気を取られてただ座っていた。

後ろからふわりと抱きつかれて頁に並ぶ活字を追う目を止める。

柔らかく頸から胸のあたりに巻き付いている白い腕を本を支えていない方の手の指先で撫で上げると、かすれたつぶやきとも抑制した嬌声とれる吐息がついさつき読みとった活字を後からなぞりだす。

「一人の変な詩人の恋愛沙汰を述べたものであった・詩人は名をういりあむ・しゃあぷ氏といって・ふとした心のはずみから・時の女詩人ふいおな・まぐろおど嬢に思いを懸けてしまった・二人の恋仲は・人の世にあらゆる恋仲にも増して・こころこまやかなものであった」

「ここに一つの神秘は・世の人々が・ついぞ・まぐろおど嬢のすがたを・見かけなかったことである・それ故まぐろおど嬢は・時の世の人にとっては・何となく空気のように思える女詩人であった・嬢は・人に知られないどこかの片隅に生きていて・白っぽいみすてり派の詩というのを書いていたという——こおろぎ嬢、尾崎翠ね——ときとして・まぐろおど嬢は・わが思う人しゃあぷ氏のもとに滞在して・幾日かの時を送ることがあった」

温いシャワーを浴びた高温な肌をに包まれわずかにせわしなく呼吸させている肉体と、小説の儚い女詩人のだれにも見られることのなかった姿とが重なる。誰も姿を知らない閨秀詩人。上気した重みを伝えてくる肉体。背中に押しつけられた胸板が朗読するオルゴールのように低いつぶやきを反響させている。二人の体が一つの息をついているかのように。

絡みつく腕をそっと解いて振り返れば彼女の姿態を見ることができる。だが、そうすると、きつとすぐに彼女は立ち上がって明かりを消してしまうかもしれない。発熱しつつある体の温もりと、腕の肌に生えそろふ見えないほどの産毛が指先をくすぐる感触をもっと味わいたかったから、誘われているのがわかって、蛇のようにまとわりつく白い腕を愛撫しつづけ、前戯ですらない曖昧な交わりの曖昧な時間をただ戯れたい。日差しが蘇ると紙面は瞬時に白熱し、文字を追えなくなった声は途切れがちに音に縮退していく。猫を眠らせないように撫でるふうに指先で優しく激しく動かして励まし、つかのま愛撫をあきらめて、頁をめくる。

何度目かに長く日が差してしばらく声が途切れ、ただの音読の励ましがただの愛撫になだれ込みそうな予感がしたとき、眠りに近い一体の感じが、初めて破れた。

「昔も、こんなことをしたことがあったかしら」

ここではない時間のことは、磨耗しきったタイルの模様を思い出すようにゆっくりと立ち上がってくるしかないから、むしろただ時間の流れるままに、穏やかな呼吸だけを感じることに気をおいていた。読んだものの記憶が浮かび上がってくるまで待つのなら、朗読と愛撫は諦めよう。うずくような物欲しさと記憶の海が奥深いところで波立つ感触の間で彼は苦しみ、その苦しみを楽しんだ。

彼女はからかうように、けれど彼のことなど本当は眼中にないように呟いた。

「昔は、なにを讀んでいたかしら。……『もう、傷つかない、』
「なんのこと？」

「三島由紀夫だった気がするけれど」

「三島由紀夫？ そんなふうなこと、書くかな」

「近代能楽集」

「ほんとにそう？」

「自信ない」

抱きついてきたとき同じに彼女はふわりと離れた。キッチンの本棚に行くのだろう。けれど、『近代能楽集』はいま、本棚に入っていない。かつていま読んでいたようにして読んだのなら、蔵書に入っているはずだが、本棚には三島は一冊もないし、床の上にも積まれている。別の本だったのかもしれないし、それに、僕らはは、三島由紀夫の小説でつながるような屈折したカップルじゃない、と彼は思った。

彼によって美砂と呼ばれ、またそう書かれる彼女は、またふわりと戻って来て、後ろから抱きついた。

レイジさんがときどき、子供みたいに窓辺の日向に座り込んで本を読む習慣をもっているのは不思議だ、と美砂は思う。彼はきちんと座っていないと集中できないと言って、キッチンの小さなワゴンテーブルに向かいあまり座り心地がいいとは言えないパイプ椅子で読んだり書いたりする。（あたしはリビングのサマーベッドにごろ寝で読む。季節不問）なにを読んでいるのかと思って後ろからのぞき込んでみたけれど、窓から射す光のせいで本の頁が真っ白になっていて読めない。（レイジさんが小説に書くなら、白熱して、とか、燃え上がって、とか形容するだろう）、と美砂はまた思う。後ろからそっと抱きつく、と、真夜中に燃える炭火の炭のように、おぼろに文字が見えた。

（きつと、レイジさんはこの瞬間のことも書くんだろうなあ）という予感がすでにあって、それは、いつもいつも気分のいいことよ

いとは限らないのだけれど、言ってみれば書くことも書かれることも二人の絆のようなもので、絆になる物がいつも心地よいものとは限らない。

（手を動かしているのはレイジさんであるにしても、彼が一人で書いているということではないのではないか。私も書いている。書き下ろすとは別の仕方、あるいは書くことの彼方で。二人で書くことは読み終えたことのない哲学書のように、未完のままの書くこと、書き続けて、永遠に届こうとすることかもしれない。永遠が人の身の上に現れるわけではない。読み終えられたことのない本は、それが至ろうとしたところの、書名だけが残される。とうとう、最後までは実現されない、脱稿も、完読されることもない、書物。）

そのようにいつか自分で書くかもしれない萌芽のような感触がして、それもまた予感でしかなく、そしていまの美砂にとっては、燃え上がる頁の文字を追うこと、男の体に巻き付けた腕がなでさすられる感触が、思考を言葉になり切らせないほど溶けるように心地よく、ただ、わずかに溶けていくことを拒むのは今声に出しつつある文字の連なりが何かの記憶を呼び出しそうな別の予感がすること、それはこれから未来に起こることの予感ではなくて、かつて起こったことの予感というか、夢の中身を思い出せないときの不安に近い。潮が満ちてくるときの波の引き際の砂のように、白いところと黒いところが、遠目に見るとくっきりしているのに、近くに見に行こうとすると、波頭が打ち寄せる度に境目が曖昧に入り込み、境目そのものなど見ることはできないものだけれど、それに似て、予感が何の痕跡なのかをくっきりと辿ろうとすると、そのたび、真っ白になった頁のせいで目が痛くなったり、なでさする指が肘の骨の浮き出て皮膚の薄くなっているあたりを刺激したりして、イメージがもろく崩れていく。頁が燃え上がる。指先がくすぐる。快感が訪れる先触れ。けれど、美砂は、いまは波に身を任せながらで、でも、流されては行かない、流されるわけには行かない、という、ほとんど文字となって眼前に浮かびそうなほどしなやかに強い衝動を不意

に感じる。

「前にも、こんなことをしたことがあったかしら」

言葉に出す又何でもない睦言でしかないようだった。（ただの思
い過ごし）かもしれないと美砂は思う。ただの睦言。でも睦言ほど
に二人だけの言葉であるものはない。おそろく。そして、（思い出
すには、二人分の記憶が必要）だ、おそろく。

「昔は、なにを読んでいたかしら」

彼の（レイジさんの）気配が遠くを探っているように感じられる。
呼吸のリズムが輪唱のように互いの尻尾を追いかけ始めた。（二人
で本を読むことができるかどうか、昔考えたことがある）さつきか
ら追いかけているのは別の確信が浮かんでくるにあわせるように、
文字の幻と言うべき物が真っ白の頁の上に浮かんできた。美砂は読
み上げる。

「……もう、傷つかない、」

「なんのこと？」

「三島由紀夫だった気がするけれど」

「三島由紀夫？ そんなふうなこと、書くかな」

「近代能楽集」

「ほんとうにそう？」

「自信ない」

抱きついたとき同じに彼女はふわりと離れた。居間に置ききれな
かった本棚のあるキッチンに行く。『近代能楽集』は入っていないか
った。かつていま読んでいたようにして読んだのなら、この部屋の
蔵書に入っていておかしくないはずだけど、そもそも、本棚には
三島は一冊も入れていないし、床の上にも積み上がっていない。別
の本だったのかもしれない。だいたい、三島由紀夫を二人で読むこ
となんてありそうもないことだ。まして戯曲など二人で読んでみた
りすると意外につまらないものだ。

美砂は彼の背中に舞い戻る。ふわりと方から手を回して頬を耳の
あたりに押しつける。自分のしている眼鏡の蔓が邪魔になり、二人

羽織の要領でそつとはずすと、彼の手がそれを受け取って床の上に置く。（あたし、あのころは、眼鏡をしてなかった）ふと思う。（コンタクトも必要なかった）（時間がたった、あのころからすると）もう日の光は直に射さなくなって、曇り空のぼんやりとした明かりが部屋を満たしている。美砂がいない間に何頁か飛ばされたのか物語は進んでいてすでにこおろぎ嬢の愛する詩人の物語は終わりに近づいていた。

「けれど人々は・ふいおな・まくろおどの居場所について皆思い誤っていた・嬢はいま・人に知られぬ処・ういりあむ・しゃあぶの骸の中に肉身を備えないいま一人の死者として横たわり・人知れぬ葬送をうけていたのである」

本が投げ出された。

そして、ながいながい抱擁がはじまった。

思い出すのは初めて美砂がこの部屋に来たときのこと、夜中の雨に濡れて冷えた体をこの部屋で暖めたことで、彼女は賃貸マンションの部屋という空間に入ったことじたいが初めてで、二部屋プラスキッチンとトイレ付きのユニットバス（ユニットバスなんて修学旅行で宿泊したホテルくらいでしか見たことがなかった）というつくりのそこが、もっと若い男が一人住まいする部屋というものである以上、漠然とした妄想というか、思いこみのようなものと重なるところと全く予想外だったところがあって、まず第一におかしかったのは本が余りにもたくさんあって、床に散らばっていたり壁際に横に重ねて積み上げられていたりすることだった。どういう本なのかわからないが、学校の図書館では見たこともない晦渋なタイトルがあったりする中に、逆に学校の推薦図書にもあったような――ただし古典的な――小説も混ざっていて、かろうじて、美砂の読書の範囲と重なるのはそういう小説の中の一点か二点といったところだった。どうして本棚がないのか不思議になって、手渡されたコーヒースタンドをすすりながら、本棚を買わないんですか？ と尋ねた。

あとあとレイジさんと呼びかけることになるその男は、即答しなかった。あまり間が空くものだから、美砂は話を聞いてくれているのかどうか不安になったくらいだった。

本棚を買いにいく暇で本を読み、本を読み終わったらまたすぐ買う、読み続けていないと不安になるから、だから結局、本棚は買いたいと思って買わないんだ、だいいち、今これくらい本があるからと思って買っても、すぐに足りなくなる。

それは、と、美砂は言った。何か捻ったつもりの答えなんですか？男は苦笑した。

捻ったつもりはないんだけどね。思ってることをありのままに言っただけ。本が好きなの？

好きです。

読んでいいよ。眠くなるまで。

眠ったら、不安です。

僕が男だから？

ええ。あなたがさっき、そうやって私を連れてきたじゃないですか。

そういわれて、男はまた苦笑した。

でも、僕が無理矢理ひどいことはしないと思ってるわけだね。

しないんですか？

するかもしれない。君はきれいで、髪がびしょぬれでつやつやしてて、シャワー上がりのいい匂いがしている。

その匂いはきつと、このコーヒーと、あと、この部屋中にある本の紙と、あと、煙草のにおいよ。

だとしたら、君の体はコーヒーと本でできてるんだ。

煙草は？

それも好きだけれど、君は煙草は吸わないと見た。間違ってる？残念。あたしのバッグ、メンソールのにおいが染み着いてるの、気がつかなかった？

そうって美砂は、タオルの上で湿気を吸い込ませているバッグ

を引っ張り寄せ、中をあけ、ほら、吸ってもいい？　といいながら、返事を待たずに火をつけた。

吸うんだったら、キッチンの換気扇の下ですってほしい。壁紙にタールが染み着いて引っ越しの時に不動産屋にふっかけられるんだ。そういうものなんですか？

ああ。

でも、わたしは困らない。

家出して転がり込んできた身分で言うことじゃないな。それに、煙草を吸う女はあまり好きじゃない。

じゃあ、あした、服が乾いたら、すぐに叩き出してくれていいから。どうせ素っ裸どうぜんの女の子をわざわざ泊めておいて外に叩き出すような人じゃないでしょ。

どうしてそう思うの？

やさしそうだから。

何の仕事をしてるかとか、聞かないの？

泊めてくれるなら、どんな仕事の人でも関係ないです。

まあ、とにかく、好きにしてくれていいよ。本なら読んでくれたかまわないから。それに、すまないけど、俺は結構これでも忙しいんだ。徹夜で読まないといけない本と、書かないといけない文章がたくさんある。これでもいそがしいから。

作家さんですか？

いや。そうだ。すこし、いや、だいぶ違う。

忙しいのに、どうしてわたしみたいな家出少女を夜中に拾ったりしたんですか？

可愛い女の子がそばにいてくれたら、もしかしたら、読書も執筆もはかどるかと思って。やっぱり、そうでもないみたいだな。

邪魔？　ですか？

いや。君、ちょっと可愛すぎるんだ。

やっぱりやりたいんですか？

泊まっていくのは君の自由で、条件はなにもないよ。ただ、本音

を言うと、条件を付ければよかったと思ってる。

……変態。

どっちにしても、好きにしてくれ。条件を付けるとすれば、一晩この部屋で好きに過ごして、あした、ちゃんと服を着て帰ってくれればいいから。

じゃあ、本を読んでもいいけど、それだけいいですか？

どれでも。どれだけでも。どんな風にでも。

初めての抱擁は、たしか、その会話を交わして何度か会ったあとだったとはずだった。近頃、体を交える度に、初めての抱擁ではなくて、そのやりとりのことをよく思い出す。何度抱き合ったかも数えられなくなったのはどうの昔のことで、その間に増えた本の数も同様だった。

あの夜一晩あけてからなにを話し合ったか、まだくっきりと思いつける気がして、目を閉じる。

美砂は零示の服をかぶったままサマーベッドに猫のように丸まって朝を迎え、お腹が空いて、それにのども渴いて水分不足で頭が痛かった。どこにいいのかわからなくて混乱し、そして勢いのまま家出してきて知らない男の部屋で一晩過ごすという無茶をしたこと、しかし、夕べは馬鹿にされているとしか思えない会話があっただけで本当にへなにもなかった。ことを思いだした。眠りにつく前に見たときとあまり変わらない姿勢で文机に向かっている男の背中が、親不孝ではあるけれどもあまり罪悪感のない家出がまだ終わっていないと示している。そつと音を立てないようにサマーベッドから立ち上がったけれど、ビニール繊維がぎしりと摩擦音を発してしまい爪先を床に着けたきりなぜか怒られると思って息を潜めて待ったが、男はただ文机に向かったままおそらくパソコンのキーボードに手をおいたまま、やはり何かを待っていた。待っていると分かったのは、美砂が意を決してそろそろと、子供のよう四つん這いで進み、男

の肩に手をかけて頬をすり付けたときだった。

どうしてなにもしなかったの、と美砂は聞いた。

男は答えた。

まだ早いから。

早くなんてない。

早いさ。

いつなら早くないの？

もっと好きになってから。

名前、なんて呼べばいい？

何でもいい。おじさんでも。

おじさんじゃかわいそう、美砂は言う。自分がそんなにへいやらしいことができると知ったことに驚きながら、嘗めるように肩に頬をすり寄せ、ささやき続けた。ねえ、名前を教えて。教えてくれなかったら、気が変になりそうなの、どう呼べばいいの、ねえ、あなたは誰なの？ どうしてなにもしなかったの？

名前なら、と、男は、静かに答えた。そんなもの、どうでもいいじゃないか。俺ときみ、それだけで不足か？

あたし美砂。聞かないほうがよかった？

そんなことはないけど、と男は答えた。一晩中、なにも書けなかったんだよ。

あたしのせい？

ああ。君のせいだ、どうしてくれる？

どうせ、書けたってつまらないでしょ。

さあな。でも、昔から、好きになった女次第で書けたり書けなかったりしたもんだからさ。

ぷ、と美砂は吹き出した。

破滅型気取りなんて、馬鹿みたい。

太宰とかを読むの？

超嫌いだけど。

なにが好きなの？

この部屋にありそうな本の名前を素直に挙げるのは悔しかった。

尾崎翠。

おさきみどり？

知らない？

知らない。

読みたい？

読みたい。

そのあと、二人は簡単な朝食を食べて、軽くシャワーを浴びてから出かけた。部屋干し用の洗剤で洗い一晚シャワールームの換気扇を回し続けて乾かした制服を着せて、男は結局着替えたとはいえあまり昨日とは代わり映えのしない格好で、昨夜とは打って変わって太陽が鬱陶しいくらいピカピカする空の下を歩いていった。どこに行くのかはつきり決めていなかった。

零示はそのあと、本屋に行ったことを記憶している。。

そこで何の本を書ったのか、はつきりと思い出せない。

セックスのさなかに本のことが気になるとしたらだいたいぶ神経病的だし、だいいち美砂に悪い気がして、とりあえず、なにも言わないことにして、ただ、単調になってしまっただけではない手の動きに意識を振り向け直し、そして、イチジクの果皮のように赤く染まって魅力的な鎖骨のあたりの肌に唇をつけた。

それまで零示の背中に回っていた手がそっと額を押して持ち上げる。何かペットとか小さな弟の悪戯を見つけて得意になっている意地の悪い姉のような顔で、そのくせ、うわずった息をしながら、美砂は話しかけた。

「い、ま、」

「え？」

「本のこと、考えてた？」

「……ああ」

「続けて」

「どっちを？」

「両方」

「難しいことを」

くすつと笑ったのは二人ともだった。

「あたしもね、本のこと、気になってた」

「あのと書き出した本のこと、覚えてる？」

「いつの本？」

「初めて一緒に本屋に行ったときの本」

「どの本だったっけ」

「ふたりで別の本を書いたんだよ」

「一緒の本じゃなかった？」

「それぞれ、違う本だった」

「そうだっけ……」

零示は手の動きをゆっくりと再開する。

「あ、ちょっと待って、思い出せそうだから」

「待たない」

「あ……」

美砂は水の中に深く潜るように目を閉じる。どの本だったのか思い出せそうな気がする。恋愛を扱った本だった気がする。そうだ。そのとき、確か、学校のクラスメートがいった、男は本命の女とは恋愛映画と一緒に見に行ったり、恋愛小説の感想を言い合ったりしないという話が脳裏をよぎり予想もしなかったことに落胆して、さらに落胆した自分に驚いたような気がする。いや、あときは違ったかもしれない。だって、まだ、全くあらずしも評判も知らない本で、中身が恋愛ものなのかどうかも知らない本だったはずで、むしろ、うちに持って帰って読んでから中身が分かった記憶がある。どんなタイトルだったが、書き出しの言葉は何だったか。

もう少しで。指先が届きそうなところまで。

ねえ、もう、来て、じれったい、

つぶやいたつもりはなかったけど、唇から言葉が漏れていた。

レイジさんは、そっとキスして、脚を割って、覆い被さり、ふかく深く侵入した。

あたしのためなら、この人は何でもしてくれる、と思ったことがあるし、何でもしてくれる？ と聞いたことがある。今からするのだいぶあたしが子供だった頃のこと、はっきり言えばまだ処女だった（非処女のいまでもまだガキといえばガキかもしれないけど）。どんな返事だったか、実を言うあまり覚えていなくて、覚えていない理由は三通り考えられる。一つは、あまりにも印象に残らない返事だった。二つは、覚えていたくないほど不愉快な返事だったので忘れてしまった。最後は、不愉快を通り越して、思い出すことが恐い。

あたしの上では、レイジさんが、あたしの吐く息、寄せる眉、唇のふるえ、一つ一つを楽しみながら観察しながら織り込んで、動いている。あつかましいくない？ でもあたしのことを全て受け止めるようにしているといえば、そうとも言える。

本のが、ずっと、頭の中というか、どこか、中の方に引っかかっていて、すっきりしない、しないのだけれどふつうなら、気が入らないセックスは燃えなかったりするのに、どういうわけか、唇を舌で割られて気が遠くなり、下肢は電気を流された蛙の脚のように痙攣し、両手はレイジさんの滑らかな背中、爪を突き立て、少しでも長く幸福でいたくて、とにかくあたしは感じまくっていた。

ぐったりと荒い息をついている美砂の腹の辺りをなでながら、僕は美砂が思い出せないでいた本のことを考えていた。

タイトルすら、書き出しすらはつきりと思いつけない。初めて二人で一緒に本屋に行ったときに買った本だから、大切にしている印象に残っていてもおかしくないのだけれど、思い出せなかった。

「本、思い出せた？」

「ううん」

美砂は目を閉じたまま笑った。

「エッチしてる間も本のこと考えてたら病気かな」

「なら二人そろって病気だってこと」

「あたしは考えてないもん」

「ほんとに？」

肉欲がまだくすぶっている。手を下の方にずらして、汗と愛液で湿って絡まった陰毛を掻き分ける。乳房ほどではない弾力のあるそのあたりをまさぐって二度目にさそっているのは、思い切りセックスをすれば思い出せないでいる本の題名のこと。頭の後ろの方で、ピントの合わない映像のまま漂っているのを振り払えそうな気がするからだ。

「何の本だったか、本当に思い出せないの」

「そんなに思い出したいのかい？」

「うん」

「なんだったかな」

「本屋、いかない？」

「どうして？」

「思い出せそうな気がするから」

「また本が増えるぜ」

「今日行かなくてもどうせ増えるよ」

「たしかに」

「いこうよ」

僕はまさぐる手を止めて、じっと美砂の顔を見た。

美砂はまたくすつと笑った。

「したいの？ まだ昼間よ」

「もう一回しちゃってるじゃん。昼夜、関係ない」

「軽くないよ、そのかわり一緒に本屋に行って」

「本屋は今度にしない？ したら寝ちゃうかもしれない」

「だから、二度目なんだから、軽くでいいじゃない」

二度目の交わりは予期せずに始まった一度目の直線的なそれと比べて、午睡の最中の淫夢のように後ろめたく恥ずかしげな振る舞いの中で滞りなく進められ、どこか儀式めいた、しかし、安定した過程を踏んでおわり、交わりの一通りがすんだ後の気怠さと快樂の余韻の中で、なおも肌を重ねたまま、見るともなくさつきまで読んでいた尾崎翠の表紙を見つめている。最近になって手に入れた本で、ふと、蔵書の量は時間の正比例の関数だというもっともらしい言葉が思い浮かんだ。

二人はシャワーを交互に使い、マンションのエレベーターを降りて、ふと零示が腕時計を見て午後の一時を過ぎていたことを思いだし、美砂はそういえばお腹が減ったねと言い、本屋に行く前にお昼を食べようか、今日は休日だからマックは高くなってるし、ラーメンでも食べようか、と喋りながら何となくだらだら歩き、気がつくのと、休日になるとフリーマーケットと古本屋の混ざった骨董市がでて混雑する駅前の広場に紛れ込んでしまっている。何が高くて安いのかよくわからないけれど、たとえば、手ごろそうな文机とかがあって、部屋に置き場さえ作れば悪い買い物ではなさそうだったりするがけつきよくまあいらぬか、と思ったり、古本だと、バラになった日本文学全集とか、あと、誰が買うのか知らないが、百科事典のサシからタの一冊だけがあったりして、要するに役に立ちそうもないものばかりがある。もっと古書らしいものが売っていけばいいのに、と思ってみていたら、突如ほとんど新品と変わらない「ガルスア・マルケス全作品」が最後の一冊以外一そろいが目に入り、零示は衝動的に財布を取り出しそうになり、美砂がその足を踏んづけた。美砂はそれよりあっち、ほらあれ、といって、ポール・デルヴォーの展覧会のパンフレットを指差す。

零示　なんでここにこんなものが。それも同時に。

美砂　デルヴォー買え。

零示　いや。こないだ買ったぞ。

美砂　これはまだ持つてないよ。

零示　ほんとに？　そう？

美砂　こないだ本棚を整理したときにあらかた見直したけど、これはなかった。

零示　ふむ。

で、結局、ふたりは中を確かめて、汚れていなかったのを、それを買った。財布はその分軽くなった。よく食べにいつているラーメン屋は、もう通り過ぎてしまっていた。

どうしよつか？　引き返す？

あそこで焼きそばとホットドッグ売ってるぜ？

こないだあの出店の食べてお腹こわした。

そうだったけ？

レイジさんは食べなかったから大丈夫だったんじゃない。あ、おんなじ人が焼いてる。やば、思い出したらお腹痛くなってきた。

じゃやめとこ。

というやりとりがあって、空腹のせいで考えがまとまらず、それでもめだかが本能で水の流れに頭を向けるようにに人の流れをさかのぼって、結局、その骨董市の端っこの、本屋の入っている駅ビルの足下のところまで来てしまい、そうなると本屋と昼飯のどちらを先にするか、二人してやはり決めかねているうちに、じゃあ、本屋の上の階に寿司屋があったからそこで千円以下の定食みたいなのにしよとかと漠然と考えて、それで、エスカレーターを上っていると、寿司屋よりも先にどうしても本屋の階を通過することになる。

先にお昼でしょ？

そうしよう。そうしないといつまでも昼飯が食えない。

そうだよな。

と、話していたのに、これもまたいつものとおり、却ってこれと言ってほしい本が決まっていけないときほどそうなのだが、二人ともそこでエスカレーターを降りてしまう。

(2)

二人の水準だと品ぞろえが充分とは言えなくて、おそらくさつきからずっと記憶に引つかかっている本もないということとはわかつているのに、本棚の間をうろうろして、本屋に来たときいつもそうするようにふたりでばらばらに店中をぐるぐる廻る。文庫。婦人雑誌。専門雑誌。外国文学。国内文芸（ミステリー男性作家、女性作家それぞれ）。国内文学（やはり男女別になっている）。マンガ。理系専門書。ゲーム。テレビゲームの攻略本。宗教。思想。心理学。教育。ペット。サブカルチャー。写真集。美術書。旅行関係。どこをみるともお互い言い交わさずにただ、猫が自分のテリトリーを巡回するように。零示が美砂の背中を理系専門書のコーナーで見かけるとおやと思うし、その逆に零示が攻略本のコーナーで中学生に混じって突っ立っているのを見ると美砂は恥ずかしくなったりする。

だいぶ昔だが、つきあい始めてから一年かそこらのころ、同じようにデート中に本屋に来て、今やっているのと同じに、お互いを追いかけるとも追われるとも言えないようにして本棚の間をぐるぐるしたことがあった。零示は、そのとき、まるでチェーホフの、そう、「犬を連れた奥さん」を思い出し、あの、劇場の階段を上ったり降りたりして、追わせ追いかけたシーンが自分たちの状態にそっくりに思えて、もしそのとおりだとすると、最後は、人目を忍んで会ったホテルで、苦しみの終わりにはほど遠いと思い知って終わるあの幕切れが、近いうちに現実になるのではないかという妄想におそわれた。じっさいには、そのころの美砂は人妻どころか未来に不安を感じろというほうが無理なティーンエイジャーで、問題があったとすれば零示が十五歳ほど年上だったことにほかならず、その差は8年たった今でも、これから十年経とうが三十年経とうが縮まったりすることはないのだが、しかし、当時は、美砂が自分よりもふんだんに多く抱えていると思えた可能性を奪ってしまうことへの恐

れにたじろぎ、しかし、会えば会うほど手放した難く執着する自分の愛情と欲情をどうすることもできず、なぜ今恋などしてしまったのか、どうしてそんなに無理な恋をしてしまったのかと、怨む相手もないむなしい煩悶を抱えていた。

一生抱き続けると覚悟できていなかったのだが、いまとなつては、まだまだ簡単なことで悩んでいたと思えるようにはなった。それを成長と呼ぶのかどうかはわからない。

零示は昔のことばかり思い出すことに漠とした不安を覚え、不安や困難を乗り越えてきて今こうやって二人で、前と変わらず昼飯も食わずに本屋で暢気にデートをできているのだから、それでいいじゃないか、と、考え、もう三十代も後半になって、いろいろ自分を意識的に肯定していかないと生きていくのが難しくなってくる年代に自分もなったのか、と、急に寂しくなった。目の前の本棚を見上げて、そこに、数日前に自分が買った本の空きがまだ埋まっていなことを知り、自分にしか分からない、いずれかき消されてしまうに違いない自分の足跡を知った。その空きを眺めているのが辛くて目を逸らし、美砂を捜そうと思った。

レイジさんどこ行っただろ、この本重いからもってもらお、と、あたしは考え、本屋の中をうろうろしていれば見つかるはずの彼が見あたらないので、携帯電話で呼び出そうかと思ったが、片手では本を落としそうでいやだったので、すこし困った。

それにしてもどこにいったというのだろう、本屋の中にいるというのに、それも、決して大きな本屋ではない、あたしたちがほしい本が必ずあるほど大きな本屋ではなくて、すこしずつ、本棚の隙間が空いたままになっているのが増えてきたような、そういう本屋だというのに。あたしたちはよく本屋に行く。いろいろな本屋に行く。大きなところもそうでないところも。旅行に行っても必ず本屋に行

く。古書店なんかあったりすると観光そちのけでそわそわと入ったりする。荷物が重くなることがわかっていてもだ。本がどれだけあってもそれほどこまらない、とまで思ったことがある。今は部屋の壁一面が本の背表紙の陰に隠れて見えなくなりつつあってすこし困っているのだけれど。床がへこんでいたら立ち退きのときに問題になる。

電子書籍にすればだいぶ増加のペースが落ち着くだろうけれど、今すでにある本が減る訳じゃない。というか、下手をすると、端末に落とした上で紙の本も買うハメになるかもしれないし、だいいち、紙の本なら一冊あれば二人で回し読みできるが、端末は一人が持つて行ってしまうていら、本棚を丸ごと持って行かれたようなもので、困った話になる。あたしたちはよく一緒に本を読む。いろいろな仕方。それがやりづらくなりそうな気がする。いくら便利になっても、あたしたち二人にぴったりの本というのはそうあるものではないし、どういう形で本を読むことになっても、たぶん変わらないんじゃないかと思う。

「それ、持とうか」

レイジさんだった。

「どこ行ってたの、もう、探したんだから。この本買って、お昼食べよ」

「ええっ。買うの」

「今お金ないからレイジさんのカードで」

「だから、そうじゃなくて」

「だいじょうぶ、あたしの初任給から出すからs」

「だから、そうじゃなくて」

「なに、置き場所？ 置き場所なら作ればいいでしょ」

「いや、その本、たぶん俺持ってるよ」

「ええっ。どこにやったの」

「あの部屋の段ボールのまだあけてないのか、それとも実家か。あー、たぶん実家だな」

「なんだ、早く言ってよ」

「ああ、でも、実家のどこにあるかは忘れた」

「じゃ、こんど取りに行ってきた」

「ええっ。またかよ」

「またっていうか、取ってきてくれるように頼んだ本、もう三冊くらいなかったっけ」

「そうだった」

「そうよう。もう、取ってきてくれないとまた書籍代がかかったらうじゃない」

「うう。実家、あまり帰りたくねーんだよ」

「わかるけど。でも、赤字回避の努力をしないと」

「じゃあ、わかった。今度取りに行く」

「今度っていつ」

「今度は今度」

「じゃあ、いつかわからないじゃない」

「だから、今はちょっと実家と気まずいんだよ」

あたしはため息をついた。レイジさんは実家がらみになると最近妙にムキになる。

何かあるのに違う。あたしに言いにくいこと。別れろと親に言われているとか。あたしもそれに近い感じではあるのだけれど。

でも、絶対に自分からは別れない。別れろなんて誰に言われても、絶対にだ。

黙ってあたしはレイジさんに本をつきだした。

「買って」

レイジさんはすこしほっとした顔をして、レジに並ぶ。あたしはその後に、少し拗ねた笑いを浮かべて並ぶ。

「ねえ」

「なに？」

「今度、実家にいくとき」

「いくとき？」

「一緒に行こう」

「え」

「て言ったら、来てくれるよな？」

レイジさんの、最近痩せ方が目立ってきた背中が急に気になってきた。なんか、愛らしい。

「からかってるの？」

「いま、急に言いたくなった」

「からかってるとしたら最低。それとも本気？」

「本気だけど、まだ本気じゃない」

「意味わかんない」

「だから、言ってみたかったんだ」

「は？ なにそれ。もうレジの番よ」

レイジさんは固まったまま動かない。

「早く買ってよ、後ろの人がいるんだから」

「一緒に行くとか約束してくれるまで、絶対に買わない」

「一緒に行ったら、別に買わなくてもあるんでしょ」

「ああ、そうだけど、でも、買いたいんだ」

あたしは背中に両手を添え、肩胛骨の間に頬を寄せた。

「じゃあ、指輪の一つくらい買ってきたら。この甲斐性なし」

叫びたかったのに、蚊の泣くような声しかでなかった。

そして、さっきから怪訝な顔で待っているアルバイトの店員の前に押し出した。

甲斐性なしとわかってつきあって8年近くになるくせに、ひどいこと言うよな、と、零示は本を買う。

千三百十円、という、高いともやすいとも言いかねる微妙な値段で、別にこれ一冊我慢して赤字を回避できるほどではないけれど、でも、今買わないと大喧嘩になるから、買う。二千円出して、紙幣が残っているかどうかついでに確かめると、一万円くらいは持っている。昼飯はなんとかなる。そろそろ三時になってしまいうから軽く

食べて、それで、この落ち着かないいらした状態を抜け出そう。自分でも最低にまづいことを言ったと思っているのだけれど、これだけのことでいきなり別れ話に発展する羽目にはならないという自信はあって、だから、そのあと、とりあえず駅ビルの一階のパンでメロンパンと総菜パンを買い、地下の食品スーパーで水と野菜ジュースを買って何事もなかったような顔をして帰って遅い昼食になったのだけれど、美砂はずっと必要最低限のことしか言わなかった。夜は零示の当番でインスタントラーメンを作ってぼそぼと食べ、そのまま会話らしい会話のないまま、また交互にシャワーを使って、電気を消したときも、何も言わないまま別の部屋に寝た。

さすがにまづいと零示は思っていた。日付が変わってから美砂の部屋の襖から漏れる明かりが消えないので、何度も開けそうになったのだが、どうしてもそうはできず、昼間の睦み合いとその後の冷えた空気の落差を思っ て苛立ち、しかし、これまでも何度か同じくらい冷え込んだことはあったのだからと思って気持ちの平衡をとりもどそうとしているうちに、やっと午前三時ごろになって眠ることが出来た。

美砂にしてもやはり寝付いたのは同じころになる。何度か襖の前まで来ては去っていく気配があつて、いま開けられたらどういう顔をすればいいのかわからず、きつと苛立った顔をしてしまつてきつと二人の間の空気の悪さは回復しないことはわかつていた。そうそうになんとかしたいところではあるのだけれど、ふと、別の考えもある、という言葉がずっと浮かんだまま消えず、そのさきにあることを思っているうちに目が冴えて全く眠れないで（昼近くまでだらだら寝ていたせいもあるが）、しかたなく部屋の電気をつけて、パソコンの電源をあげた。

小説でも書こう。

考えたことが口からこぼれていることにはほとんど気がつかず、パソコンを布団まで引っ張りよせて腹ばいの恰好で、ビート板に手をおいて泳ぐ姿勢でキーボードに指をおいた。

明日の寝不足で仕事に差し支えるかとは思ったが、しかし、憂鬱に興奮した頭脳を休ませるには、これしかなかった。書きかけになっていた小説のファイルを探し、タイトルがまだ付いていなかったことを思い出した。投げ遣りな気分も手伝って、枕元につみあがっている文庫本に目を走らせているうちに、敬愛する女性作家の一冊が目にとまった。

タイトルが決まった。最終的には、別のタイトルをつけなくてはいけないと思うが。

「道化師の恋」

松井課長が、携帯電話を切って顔を上げた。

「今、予算が通ったよ」

「それで？ バーナムの森はダンシネインの丘に登りましたか？」

「市会は割れたが、市長派が競り勝った、と」

「あああ、あああ、ああはははは！　そうか、登りましたか！　は、ははあ、はは、ははははは！」

俺の勝ちだ、俺が、俺が、貴様のマクダフだ、よく覚悟しておけ！　はは、はははははははは！」

病室の空気は凍り付き、なにも動く気配がなかった。

ベッドに無言のまま付き添っていた橘早苗が、ふるえる手を伸ばし、ベッドの防止転落柵を握りしめている神永の拳に指を添えた。

「もう寝た方がいいわ」

「これが寝ていられるか！　みろ、あいつの百年天下もこれで終わりだ、百年、百年だ、百年、この町を牛耳ってきたあいつらの権勢がこれにて仕舞、どうだ！　俺の勝ち、勝ちだ！」

堰の切れた哄笑に追われるようにして、ぼつぼつと何人か、あるものはため息をつきながら部屋を出ていく。僕は少しだけ迷って、やはり部屋を出ることにした。スライド戸を閉める直前に肩越しに振り返った。橘の背中に隠れて、病人の姿は見えない。うなだれて

いるのか、それとも病人の顔色をのぞき込んでいるのか、橘は、普段はつきりと伸ばしている背筋を曲げ、ほとんど、病人の姿を覆い隠していた。とどまるところを知らぬ気に見えた哄笑は衰えていき、彼が扉をそつと音を立てないように閉めたときは、もう、弱々しい席込みと混ざりあつて、紙屑がこすれるような音にしか聞こえなくなっていた。

僕が意識ある神永の姿を見たのは、それが最後だった。

神永という人にをこの目で見たのは去年、僕が今の職場に異動してきたことだった。

彼は有名人だった。前の職場ではいろいろなことを聞かされていた。いわく、傍若無人。文学青年崩れ。政治好き。権力に反抗的。市議員が相手でもびくともしない。仕事はできる。できるが、いささかコミュニケーション能力に難があつて、有り体に言えば、少しでも相手と合わないとは喧嘩になることが多い。それが上司であっても。

つまり、役所という職場において、仕事はできるが上からも下からも扱いにくい人、という評価だ。

実際、会って初日に、いきなりこんなことをいわれた。

「誰だ？」

「は？」

「味方だ、と言えたら合格点」

「何のことですか？」

「ハムレットだよ、ハムレット」

そんなことを言われても、ふつうわかるわけがないじゃない。だが、彼は一事が万事、すべてそんな感じだった。仕事の話をしていてもいきなりなんだかわからない引用を混ぜ込み、わかりかけていた話がわからなくなってしまう。本人の頭の中はすべて整理されているらしくて、こっちが煙に巻かれていると、「じゃ、整理するけど」とか言い出して、ぼんぼん、と、やるべきことが弁当の具でも

詰め込むみたいにそろっていった。

もしかして天才なのかと思ったこともあった。でも、天才なんかこんな市役所ごときにいるわけがない。というか、他の人では代え難い仕事というのがきわめて少ないところが役所の性質だから、はつきり言って、神永みたいな職員が自分の能力だけで職場を引っ張りすぎて、周りの人がついてこれないとか、あるいは後任の人が仕事ぶりを再現できないというようなことがあると、結局、組織の仕事としてはブレーキがかかってしまう。

このブレーキ云々は僕の前の配属の先輩たちの受け売りで、実際のところ、役所に入ってからまだやっと異動一つ目、職場は二つ目でまだそういうことを実感しているとはいえないのだけれど、すくなくとも、神永さんの仕事はどこか神懸かっていた。その成果もそうだし、その普段の仕事ぶりにしてもそうだった。

まず、一日中しゃべっている。相手がいてもいなくても。相手がいないときは悪態をついている。不思議なことに、上品に悪態をつく。言葉の選び方がいいのか、どういうわけか、聞いていて不愉快になることがあまりない。もしかしたら、音楽的な独特の節回しがついているせいかもしれない。それに、他人の人格とか振る舞いをくさすことをほとんどせず、公務員の仕事を大きな力で振り回す諸々の事象に対して呪詛をあげた。だから、その大きな声とかのべつしゃべっていることとかには迷惑だと思っけていても、その内容までを否定する人はそう多くないようだった。

事実は知らない。だが僕にとっては、文学オタク崩れで、いい大学をでてきたのに地方公務員になってしまったがためにプライドを肥大させ、出世しようにも口が災いしてその道をふさがれた30男でしかなかった。

神永はひたすらうつとうしい存在だった。それまで区役所において、初めて市役所本庁に移ってきて、毎日彼のすぐ前のデスクで仕事をするようになったわけだけれど、初日の「誰だ？」に始まって、毎日、文学作品の謎かけをかけられ、それが解けないと仕事上のこと

で質問したり教わろうとしたりしても、教えてれなくなる。そのくせ、だいたい仕事の成果物がでた後で、かならずあれがこうで、これがこうで、と言われて直させられた。たまったものじゃない。けれど、異動して来たで、役所に入ってから職場が二つ目、つまりまだ尻に卵の殻がくっついた状態の僕には、その神永の指導がなくては日々の仕事な進まなかったことは間違いなかった。

「お前は何だ？」

ある朝、朝礼が始まる直前に、神永が湯気の立つコーヒーをすすりながら、そうつぶやいた。僕はうんざりしながら返事をした。

「はい？」

「あ？」

「いや、神永さんがいま、何かおっしゃったから」

「独り言だよ、ひとりごと」

いやにはつきりした独り言を言うな、と思った。

「それもまた何かの引用なんですか？」

「いや。別に引用でも何でもない。誰だって言うせりふだろ、自分に向かってお前は誰だ、って、それくらい、自問するのも大人のたしなみだろ」

「そういうもんなんですか」

「そうだよ、大人になるためにはな、それが哲学であると気づかれているか否かを問わず、そういう精神的な自己鍛錬が必要で、それは一生継続けられる問いなんだよ」

「一生ですか」

「そういうもんだよ」

朝から何を言ってるんだ、こっちはこれから仕事なんだ。と言い返したかった。むしろ、いい大人がそんなことを朝から言ってる方が、よっぽど子供じみているじゃないか。冗談じゃないと思った。

読経の物憂うさというのは、死者のことを思い出させる作用があるに違いない。通夜の席で神永の面影をそれとなしに追っていた。だが、一年間の間めにした不可解な振る舞いばかりが思い浮かび、一つくらいいい人だった、と思えることが一つも拾い出せなかった。心の中を誰かに覗かれたくない気持ちから、ひたすら表情を殺して耐えた。たぶん多かれ少なかれ、他の人たちそうなのかもしれない。親族の葬式でもないところでは、誰しもそういう風にして、本音を隠しているのだろう。そう思えば良心の呵責も少しは晴れる。

僕の焼香の番が来た。立ち上がって、遺影の前まで額に香をかざして灰の上に巻く、あの、一生かかっても慣れることができないにちがいない儀式をする。遺族の人たちに軽く一礼して席に戻ろうとしたとき、鳥の群のような参列客の何列もの向こうの、ずっと向こうの扉が開いて、喪服姿の若い女が入ってくるのが見えた。

それがだれだか、一目ではわからなかった。蒼白な頬に指した紅がきれいで、細い体の線はもろくて折れそうなのほどだったけれど、鋼の決意を伺わせる強い足取りで、一番後ろの列の、誰も座っていない列の端に向かい、たちまち、鳥の群の一羽にとけ込んだ。

心臓が一瞬止まって、爆発した。

橘早苗だった。

橘早苗は、入庁が同期で、採用時の研修クラスが同じだった。

僕は最初から彼女のことを気に入っていた。

恋していた、ということだと思う。

斎場の門の外で待ち続けた。

雨が弱く降っていた。傘は無かった。背広がどんどん型くずれし

ていく。その上、蒸し暑くなってきたが、脱ぐ気はなかった。
黒ネクタイも取る気はなかった。

ほとんど弔問客は帰ったと思うころになって、橘が出てきた。門のすぐ外の姿に気がついてたのかどうか、喪服に合わせた色の傘の陰に隠れたまま、歩いていこうとする。

「橘さん」

立ち止まった。

「僕です」

振り返った橘をみても、今度は、心臓は止まらなかった。斎場の駐車場の黄色がかったハロゲン灯のせいで、さっきの室内に入ってきた瞬間ほど頬の白さが目に付かなかったせいかもしれない。

「お久しぶりです」

「お久しぶりです」

表情からは何も読みとれなかった。すんでのところでこの女を憎みそうだった。心臓の音が聞こえないくらい憎悪が膨らんだ。一年前に思ったのとは全く反対のことを、同じほどの強さで思った。ハロゲン灯の明かりがもしも純白だったら、彼女の首に手をかけたかもしれない。

あるいは、それを思いとどまったのは、彼女が不意に発したせりふのせいだったかもしれない。

「シェイクスピアを読んでみた？」

「ちよっとだけは」

「嘘ね」

「嘘じゃないさ」

「だからだめなのよ」

四年前も、同じ会話をしたことがある。

心臓が肋骨をはじきとばす勢いで動き出した。

「シェイクスピアを読んだことある？」

「ちよつとだけは」

「どれを？」

「ハムレット」

僕はかろうじて、聞いたことがあるくらいの題名をあげた。

「生きるべきか、死ぬべきか」

「そうそう、それぞれ」

「尼寺へ行け」

「あまで？」

「尼寺へ行け、よ。知らないの？」

「ごめん、ほんとは読んだことがないんだ」

「ああ、そうなの」

橘さん、とそのころは呼んでいた。心の中で呼ぶときもそうだったし、そうでないときもそうだった。

二週間だけの新人職員の採用研修が終わった日の打ち上げの席。少し雰囲気のいい席。慶応を出たという男ががセッティングした店で、靴を脱いであがって、フローリングの床のクッションに座る、少し不思議な雰囲気の店。学生のうちからこないいお店に来たことなんてなかったし、学生でなくなつてからの二年間は就活とアルバイトに明け暮れて金も遊んだこともなかった。多少の気後れはあった。

僕は橘さんの隣に座っている。

知的で、きれいで、落ち着いた感じがする、すてきな人。

すこし僕は興奮していたかもしれない。

女性を口説くなんてしたことがなかったけれど、初めてまともに就職した自信からくる余勢を駆って、そうしてみたいと思っていた矢先に、この会話だった。この路線のままだと話すことがもうなくなってしまう。

「こういうお店って来たことある？　僕は初めてなんだけど」

「うーん。何回か、来たことあるかな」

「え、そうなの？」

「学生時代につきあってた人、と」

「橘さんて、社会人経験あるんだよね？」

「そうね、でも、会社に勤めてからはずっと忙しくて、居酒屋で忘年会したり大学の同期と女子会するくらいだった。あんまり私飲めないから、そんなに飲みたいって思わない」

「今も？」

「そう。これ、トマトジュース。最初だけレッドアイにしておいて、あとはこればかり飲むの」

「レッドアイ？」

「ビールとトマトジュースのカクテル。ほんとに二日酔いの朝に迎え酒的に飲むらしいんだけど」

「おいしい？」

「ぜんっぜん。でも見せかけで飲むならトマトジュースの方がウーロンハイよりもきれいだし」

「そういうもののなの？」

「そうよ」

「橘さんて、大人っぽいというか」

「そう？」

「うん。歳、同じくらいだと思うんだけど」

「褒めてくれてるの？」

「褒めてるっていうか、その、僕は、社会人経験もなくて、それで、うまく試験にだけ何とか通って、今採用されてるけど、なんていうかな、やっぱり、仕事していた人は違うなって」

「あで、でもな、落ち着いているように見えても、それほどいいことってないの。内面はそんなに穏やかでなくても気が付いてもらえなかったり」

「そう？ ガキっぽく、とか、中身がなさそうにみられるよりもいいとおもう。面接のとき、見抜かれそうな気がしてずっとビビってたよ」

「だれでもそんなものよ、きっと。私だって」

橘さんは口をつぐんだ。

「気分悪いの？」

「ううん。なんでもないから。……ちょっと飲み過ぎたみたい。あれは、いかさま、意味なきいたずら」

そう言ったきり、赤い飲み物が入ったグラスをそこに残したままゆらりと立ち上がって、よそで盛り上がっているグループに入っていくようだった。

誰もみていなければ、突然沸き上がった、その赤い液体に口を付けたい衝動を押さえられなかったかもしれない。

橘さんが戻ってきた。水のグラスを二つ手に持っている。

「はい、お水」

「どうして二つ？」

「浪川君、酔ってる」

「そんなことはないよ」

膝を折って座った彼女は僕の前に水を差しだし、ほら、と勧め、自分も一口すすった。僕の目はグラスに吸いついた唇に奪われた。グラスの縁がその唇から離れ、また唐突な台詞をおくりだしたとき、内心の動揺は最高潮に達した。

「ハムレット、読んでみたら？」

「難しくない？」

「べつに。人間のことが書いてあるだけ、あとは読むかどうかよ」

「やっぱり、難しそうだけど、読んでみようかな」

「いままでも時々人に勧めてきたんだけど、読んでみようって言った人の大半は結局読んでくれなかった。勧め方がヘタなのね」

「そんなことないよ。読んでみるから」

橘さんはグラスをとん、とテーブルに置いた。あわてて目をそらして、でも、横目で伺うと、橘さんはグラスについた口紅を見ているみたいだった。

心臓をえぐる一言が飛んできた。

「嘘ね」

「嘘じゃないさ」

「だからだめなのよ」

「だめと言われようが、読んだね」

「嘘よ」

「読んだ」

「じゃあ、何か思い出せる？ ハムレットの台詞くらい」

「恐れることはない、バーナムの森がダンシネインに押し寄せてくるまでは。……マクベスで、悪かったね」

少しでも橘が息を止めたように見えれば、僕は少しでも、その細い首筋に、速やかな脳髓に、青い血でも流れているかもしれない心臓に刃を叩きつけられたと思えたに違いない。じっさい効果はあった。今夜の応酬で決して怯んだことのないが唇がわずかに開いたまま一息か二息ほど滞る。だが、僕が惨めな勝利を確信した瞬間、耳を覆いたくなるような憫笑のささやきが、ふふふ、と漏れ聞こえ、そして、僕の心血を根こそぎにするような哄笑に変わっていった。

「あはあ、あはは、何それ、そんな台詞、誰でも知ってるわよ、あは、あはははは、何それ、たった今覚えたみたいな台詞、いくら繰り返したってただの鸚鵡返しよ、プロンプターだってできるわ、そんな鸚鵡返し！ はあ！」

「君はかもめのままだな」

「なによ、急に別の作家を持ち出して、馬鹿にしないでくれる？」
僕はすんでのところで、トリゴーリンの台詞を一つ思いだすために意識を集中させるところだった。だけれど、そんなことをしても決定的な打撃を与えられそうもないのはわかっていたので、すぐにやめた。もともと、せいぜいこの四年、仕事の合間に手すさびで研いだ程度の付け焼き刃が真っ正面から通用するとは最初から思っ

いなかった。

だから、正攻法にでることにした。真っ正面から打ち込んでやる。

「まだ君のことが好きだ」

「知ってる」

「君はまだあの人のことが好きなの？」

「いつまでもよ。あなたのことが嫌いなものと同じだけの時間、好きだわ」

「どうして、あんな奴がいいんだ」

「さあ、でも、あなたじゃ一生かかったって及びもつかないかもね」

「どこが？ 教養か？ 仕事か？ 口説き方か？ セックスか？」

「だったらきつと、その全部よ。……セックスは論外。君に抱かれるなんて、冗談じゃない」

彼女は頬を赤くすることもなく言い切った。

手持ちの武器になる言葉はもう何もなかった。胸の中が空っぽになり、憎悪も劣等感も感じずにすめばいいと思った。

雨が降り出した。弱くて生やさしい水滴が鼻先をかすめて落ちる。だが、遠くで雷の音がした。すぐにひどい雨になるだろう。

橘は歩きだした。かかしのように突っ立っていた僕のそばを通りざま、ふと思いついた風に立ち止まった。

「タクシー、呼んでくれる？」

肩口に息が掛かった。橘の息が僕の吸気にまざり、心臓に滞留している血液が沸騰した。

情けないことに、僕は車の通るのすらまれな道路にタクシーを探しにでた。血管の中を煮え立つ憎悪と情欲が流れていて、それが精神を侵していた。これからずっとこの毒を味わいながら生きるくらいだったら、むしろ死にたかった。

空車のタクシーが運良く通りかかった。手を挙げるとすぐに止まって扉を開けて迎え入れてくれようとする。

後ろを振り返ると、橘は傘を閉じながらすぐにやってきて、礼も言わずに乗り込んだ。僕が離れようとする、身を乗り出して、こ

ちらの顔を今日初めて、まともに見た。

「乗らないの？」

「乗ったら、何をするか、自分でもわからない」

「何をするかもしれないの？」

「知らないよ。もう君に会いたくない」

「だったら、この夜が最後だわ。どう？」

「責任、持たないよ」

「好きにしたら。あなたにできることなんて、たかがしれてるもの」
音もなく空が光った。追い込まれるようにして足をステップにか
けた。橘はすらりとした腰を奥の方に引き、僕の座るところを作っ
た。

扉が閉まる。どこまで、と運転手に聞かれて我に返ったが、一声
早く橘が返事をしていた。

「関内まで」

「高速に乗ってもいいですか」

「大丈夫です」

驚いて振り返った。橘の表情は暗がりの中にとけ込んで窺いよう
がなかった。空の高いところで岩石が衝突する音が響いて、車が走
り出した。

二人とも一言も交わさないまま時間が過ぎていった。僕は情欲は
高まり続けていた。手でも触れようものなら最後、もう何も隠す気
はなかった。きつと前をにらんだまま微動だにしないシルエットの
どこかに軟らかいところがあるのではないかとちらちらと窺ったが、
しかし、僕にもわかるような隙はどこにも見あたらなかった。

やがて、車が高速に乗り安定した走行に入ると、気分も多少は落
ち着いてきた。数秒ごとに夜間灯が窓の外をよぎって、瞼をいつそ
う重くする。

だが、乗車する直前、空が裂けたような一瞬の閃光の中に色彩を
失って輝く頬と唇の印象がずっと頭の心に残り続けていて、とうと
う睡魔は脳髄の奥までは侵すことができなかった。そこはもう、毒

にたっぷりとやられていたから。

(2) (後書き)

作中作の「道化師の恋(仮題)」は、いずれ独立した作品として完結させる予定。

シェイクスピアの引用はだいたい福田恒存の翻訳に準拠していますが、本の引用をそのまま喋るのは不自然なので、適当に変えています。

いくらなんでも、この作中作の登場人物たち、名前が適当すぎますね。

「波川君」とか。

「神永」とか。

独立作品に仕立て直したときは、多分別の名前になると思うのですが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6829/>

ブッキッシュな二人

2010年10月8日12時46分発行